

フランシス・ベーコン作品に対する批評の転回とその文化的背景 —— イギリス国内における抽象表現主義受容と関連して

梶田 倫広 (早稲田大学)

戦後イギリス美術を代表するフランシス・ベーコンは、1960年代、同時代の主な芸術動向とも言うべき抽象表現主義とは一線を画し、一貫して人物画を描く「具象画の鬼才」、「ターナー以来のイギリスの巨匠」という名声を確立する。それはテート・ギャラリー（1962年）などで開催された回顧展、1964年のカタログ・レゾネの刊行や、1962年から断続的に続けられることとなったベーコンとデヴィッド・シルヴェスターとの対談などによって、国内外に広く認知され、確固たるものとなった。

しかし、ここでベーコンの作品を称揚する際に用いられる抽象表現主義対具象という二項対立的な図式は、1950年代において自明のものではなかった。ジェームズ・ハイマンが指摘しているように、1950年代において、アメリカの美術である抽象表現主義の対抗軸は、社会主義的リアリズムであり、ベーコンやジャコメッティのようないわゆる「具象」作家たちは、むしろ前者に近い精神を持っていると捉えられていた。事実、ベーコンによる《ファン・ゴッホの肖像のための習作》と題された連作(1956-57年)は、同時代批評において、抽象表現主義、とりわけウィレム・デ・クーニングの作品との類似性が指摘されていた。例えばローレンス・アロウェイは、まさにデ・クーニングとの類似性によってベーコンの作品を「現代的」と評価した。

このようにベーコン作品のモダニズム性を抽象表現主義と接続させることで成立させる1950年代中盤の批評言説と、抽象表現主義との関連性を否定し、ベーコン作品に固有のモダニズム性を見出す1960年代の批評言説との間には、極めて大きな「断絶／転回」が見られる。しかし、先行研究の多くは1960年代以降に成立した言説に立脚してきたため、1950年代中盤のベーコンに対する同時代批評は、これまで殆ど顧みられてこなかった。

発表者は、1950年代中盤から1960年代の間に生じたベーコン作品への批評の転回には、イギリス国内における抽象表現主義の受容から反発へと至る反応と一定の関係性があると仮説を立てる。1950年代初頭から同国に紹介されていったアメリカの新しい美術動向である抽象表現主義は、1959年にテート・ギャラリーで開催された「新しいアメリカ絵画」展で受容の頂点を迎え、その後、イギリス美術を脅かす文化的脅威として認識されるようになっていく。本発表の目的は、そのような時代背景において打ち立てられた、ベーコンの「具象画の鬼才」というイメージが、ベーコンの鮮烈な作品によることもさることながら、むしろモダニズムをめぐるイギリス美術のアメリカ美術に対するナショナルスティックな文化的闘争の産物であった可能性を明らかにすることである。